タウルスの右耳　◇　堂那灼風

きっかけは恋人の自死だった。それからおよそ二年が経った。いくらかの紙幣を代償に得た情報を頼りに、トーヤは町外れのタウルス人居住区に踏み込んだ。そこは質素な家屋が立ち並ぶ田舎町然とした区画で、活気というものがあまりない。白を基調とした風景には出歩く影もなく、まるでゴーストタウンのようだ。それは彼らの性質に由来する土地柄であり、トーヤもそのことは理解しているのだが、たった今抜けてきた街並みの賑やかさを思うと落差に驚きを隠せない。

目的の建物は表通りを一本外れた裏道にあった。隠れるでもなく堂々と、周囲と同じ白壁を路地にさらしている。トーヤはひと呼吸つくとインターホンを押した。

「開いている。入るがいい」

カメラ越しに見えているのだろう、低い男の声が促した。トーヤのような手合いはやはりここを訪れるものらしい。随分慣れた口調だった。

ドアを開けるとそこには木目調の家具で統一されたリビングが広がっている。奥にはキッチン。寝室は左手に見える階段を登った先だろう。かなり狭い作りの家だ。壁の一面を埋めてなお余りある本の山がいやに目立つ。

「ケイのバーで聞いた」

トーヤは声を張り上げた。上階からゆっくりと人影が降りてくる。病的に白い肌と豊かな黒髪を持つ壮年の男だった。

「あなたが手術を手引きしてくれると。リッカーさん」

トーヤは目の前に立つ男に確認した。近くで見るとしわの少ない白皙の長身だ。華奢というわけでもなく、対面するとやや圧倒される感じを受ける。手狭な家がいよいよ似つかわしくない。

「ケイから聞いている。……君は人間をやめたいと？」

人間を、と仰々しい物言いでリッカーは問い返す。落ち着いて威厳のある声。教師や宗教者にでもなればさぞしっくりくることだろう。
「そうだ。俺はつながりたい。あなたたちのように」
ふむ、とリッカーは息を吐き出した。彼はおもむろに右手を上げ、顔の横に垂れた髪をかき上げた。そこには右耳がなかった。
「これが私の選択だ。良いことばかりではないぞ、君。つながるということがどういうことか。体験せねばわかるまいが……」
「迷った。もちろんあなたたち離脱者のことも知ってる。それでも俺はつながったほうがマシだと思ってここへ来た。わかっているでしょう」
すべてわかりきった話。トーヤはリッカーの情報を得る前に、つまり手術のつてを探す前に、彼らがどういう状態にあるかをできる限り調べ尽くした。それは体験を伴わない知識でしかなかったが、それでも真剣に彼は苦悩し、つながることを選んで情報を買った。その時点で手術への道のりは半分過ぎてしまったようなもので、あとはこの男に具体的な指示を受け金を支払うだけなのだ。リッカーの忠告も聞き流されるための手続きでしかない。
「君のような若者を何人も見てきた。本音を言えば、私はこの手術を勧めたくはない」
なぜ我々がつながったか、君は知っているかね。リッカーは言葉を継いだ。トーヤに椅子を勧めながらふたつのカップを用意する。リッカーはテーブル上のポットから湯気の立つコーヒーを注ぎふたりの間に置いた。彼はそのままブラックで口をつける。
「私はこのコーヒーを素直にうまいと感じる」
それに倣いトーヤもコーヒーをすする。飲み慣れたインスタントよりも苦味が強い。
「しかしつながった人間は……なんと言い表せば良いか……このコーヒーはうまいものだ、と認識する」
そういうものらしい、とはトーヤも聞き知っていた。実感こそなかったものの、タウルス人とはそういうものなのだと。

そもそも彼らは弱りきった難民だった。驚くべきことに戦闘の用意を一切持たず彼らは恒星間の長い漂流を乗り越え太陽系に到達した。彼らは思考と対話の種族だった。

突如として飛来した数万の難民に対し、地球人類は大いに戸惑った。しかし市民たちの論調は――特に先進諸国において――友好的な知的生命への人道的な尊重が多数派を占めた。彼らを追放ないし殲滅するのではなく、受け入れ共存するべきだと人々は主張した。その波に背を押され、各国首脳が難民受け入れの合意に至るまでさほどの時間はかからなかった。

かくして新たな地球住民となった異星人を、地球人はタウルス人と呼称した。牡牛座方面からやって来た種族であるため、そして彼らの言語における「人間」の発音が地球人には難しかったためである。

それからおよそ半世紀。各地に作られた居住区でタウルス人は慎ましく地球人との共存の日々を送っている。なにせ争わない種族である。必要な取り決めを交わし基本的には相互不干渉の方針を取ることで、今のところは平穏が保たれているのだった。

「しかしすべてがうまくいった移民とは言い難い」

彼らは数世代にわたる宇宙漂流により疲弊しきっていた。それこそ個々の意思や人権を後退させてでも集団を守らなくては種族を維持できないほどに。長い旅の中で彼らは言語を統一し、宗教を溶かし合わせ、思想をすり合わせ、争いの種を潰していった。それは痛みを伴う暴力的な手術であったが、長い時間と彼らの文化的成熟がそれを可能とした。彼らは母星を追われた難民である。敗北者としての共同意識もまた彼らの団結を強めた。存続すべしという共通の目的に向かって彼らの意思はまとまったのである。

その中で彼らはつながることをも選び取った。

右耳に埋め込んだナノマシンを用いて彼らは意識の一部を接続しネットワークを構築し

た。ネットワークにおいて彼らは群体であった。つながった彼らは自意識を薄れさせ、種族全体としての思考を獲得した。それは合理的でよく検討を重ねられた決断として表れた。個々人の意見衝突はあたかも一個人の内心の葛藤のように処理され、彼らひとりひとりは大きな思考体の脳細胞のように存在した。種族にとって最適な解を選びながら苦難の旅は続いた。ときには病気や食糧不足により同胞を切り捨てる判断を下すこともあったが、その際にさえ個々の意識は集団の意識に上書きされ、切り捨てられるべき者はさも当然のように従容と切り捨てられた。地球移民に際しても、収容しきれない多くの同胞がそうして切り捨てられたのだ。その歴史は苦い思い出として彼ら集団の意識に残り続けたが、仕方のない犠牲を後悔することはないのだった。

「その結果あなたたちは生き残った。こうして新天地にたどり着いたわけだ」

「今や悪習としか思われん。生き延びるための避難措置でしかなかったのだから」

「離脱者たちはそう思ってるんでしょう。だが俺は……」

リッカーはトーヤを制して言葉を引き継いだ。

「君たちは孤独を恐れる。個人であることを嫌う。集団になることで救われると信じている」

それは若者を中心に広まりつつある一種の信仰だった。タウルス人の文化が明らかになるにつれそれに興味を持つ者も増えた。中でも際立って特殊だったのが彼らの意識共有である。表立っては個人として意識を持ち社会生活を営みながら、精神は互いに接続し巨大なひとつの思考を形成する。個人は内外の刺激に接し思考するためのいわば端末でしかなく、個人的な悩みや苦しみはもはや彼らの人生において決定的なものとはなりえない。それらはすべて集団に吸収され蓄積した経験や集団の思考によって片付けられる。良いことも悪いことも、精神的な働きはすべて。感情や思い出はもはや個人の財産ではなく集団の思

考材料だ。
「私がまだつながっていた頃、初めて触れた地球人のあり方を心底うらやましいと思った」
リッカーは述懐する。
「そのうらやましいという感情も、君たちに接して得た感動も、私はいずれ私の思い出とも誰かの思い出ともつかない曖昧なものにしてしまう。君たちは君たち自身の思い出として持ち続けるのに。それがたまらなく嫌だった。私は私なのだとそのとき気付いたのだ」
切り落とした右耳にリッカーは手をやる。感動がつながりの中に回収され霧散する前の一瞬、彼はその一瞬に目を覚ました。どちらを良しとするか。突き詰めれば判断はそこに帰着する。種族としての判断が下る前に、リッカーという感覚器は個として生きることを良しとした。さながら脳に先んずる脊髄反射のごとく、若いリッカーはその場にあった果物ナイフで右耳を切り落としたのだ。
「我々離脱者はつながりにおいてエラーと見なされる。しかし本当は取り戻しただけなのだ。独立した肉体、独立した精神。意識共有という技術に浸りながらそれらを今なお保っているのは、本来我々も個として生きるべき種族だからだ」
つながらなくとも生存できる環境に身を置くことで取り戻しえた自己、それが離脱者の本質だとリッカーは語る。
「苦しみをただひとりのものとして抱え続けるのがそんなに嬉しいか？」
トーヤは声を荒げた。良いことも、悪いことも。個人が個人であり続けるならばすべてを自分で引き受けなければならない。
「俺たちは本当にはわかり合えない。ひとりでいるから人間は死なないとならない」
「わかり合うことと混ざり合うことはイコールではない」
個が群の一部になったところで、そこには個と個の間の交流はない。かつてネットワークの一端末であった男は続ける。
「つながればその苦しみは薄れるだろう。個人の苦しみはネットワークに溶ける。みなの

感情が常にぼんやりとある。そして記憶や思い出は死してなお共有意識に残り続ける。ある意味で死をも乗り越えている」

トーヤは頷きを返した。それこそが自分の求める世界だと。誰もが孤独に苦しまず、正しい判断のもと生を全うできる状態。

「つながるのはとても合理的な判断だ。あなたたちが種族を保全するために考え出したやり方はつまり、心や命を危険から守るやり方だ。俺たちはときに変に突っ走った行動をとる。自分で死んじまうみたいな」

顔を伏せトーヤはうめいた。

「俺はマリーをわかってやれなかった。寄り添えなかった。俺の言葉は届かなかった」

悩んでいるのは知っていた。トーヤはあたう限りの慰めや歩み寄りを試みた。しかし結果として、彼の恋人はその心を秘したまま死を選んだ。予告なく、まるで旅行にでも発つように。

「それが人間的であるということではないか？　私たち離脱者はみな、その突飛な人間らしさを思い出しつながりを捨てた。人間は奇妙な天秤を持っている。目の前の一時の苦しみと残りの人生すべてを秤にかけて、なぜか死を選んでしまうような奇妙な天秤を」

白い頬をわずかに紅潮させながらリッカーは続ける。

「死を選ぶことが正しいとは言わん。それは概ね行き過ぎた選択だ。しかしときに行き過ぎてしまう不均一な波こそ、愛すべき豊かさだ」

「奇妙な天秤だの行き過ぎる波だの、そんなものないほうがいい……」

顔を歪めてトーヤは否定する。彼の心もまた波に翻弄されている。大切な人を厳しい波から救い出せなかったという事実が彼の心を揺らし続ける。その苦しみを抱えてここにいる。そしてその苦しみを目の前の男は知りもしない。

「我々の先祖が長い航海に耐えられたのは一筋の希望を見ていたからだ。新天地にたどり着けるという計算があったからこそ、合理的

判断で苦しみをやり過ごすことができた。人間はそうではない。たとえ生活の九割が苦しみであったとしても耐えられるのは、一割の喜びを十にも百にも感じ取る力があるからだ」
「そのボケた天秤が判断を誤らせる。要するに人間は目先のことを過大評価するとあなたは言いたいんだ。それが楽しいことであれば人生はハッピーだろう。でもそれが苦しみばかりだったら？　あなたの言う一割の喜びも霞むほどの苦しみに満ちた人生だったら、人間はどうなる」
もはやトーヤは泣き出さんばかりの勢いだった。その最悪の例を彼は知っている。悲観のあまり命を絶った人間を。
「君の天秤もとても人間的だ」
リッカーは首を振った。
「君は悲しみに直面して感情を遠ざけようとしている。それこそボケた天秤の仕業だ」
同じ言い回しで返すその声は深く、教え諭すように。
「私はつながりを捨てて良かったと思っている。思い出の残り方はそれぞれだ。苦しみに悶えること。目にしたものの鮮やかさに震えること。そして輝かしいものを自分の中に持って生きられること。これはつながりの外にあって初めて味わえる喜びだ。私という唯一無二のフィルターを通してしかなし得ない感動だ」
「それでもタウルス人の大半は今もつながって生きている。地球人のコミュニティからも離脱者は出てないはずだ。そうでしょ？」
それもまた事実だった。タウルス人は群体としての思索の中に生きる。つながって生きるがゆえに出歩いて接触する必要もなく、居住区は静寂に包まれている。つながるための非合法手術を受けた地球人たちもまた、その調和の中に閉じこもり戻ってこない。
「彼らは人間を知らんのだ。何世代もつながって生きてきた彼らは。地球人はまた話が別だがな。あれは個であることに絶望した人々だ。群としてあることに救われているのだから戻ってくるはずもないさ」

「どうしてあなたは俺をそうまで引き止める？」
　コーヒーは冷め、焦げ茶色の液面にふたりを映している。席を立つリッカーの動きに合わせて波紋が揺れた。
「後悔と、罪悪感だろう」
　うずたかい本の山の前でリッカーは立ち止まる。それらを見回しながら彼は言う。
「これは私が最初に手術を案内した女の持ち物だ。不要になるだろうからと私に残していった。彼女はこの蔵書をとても愛していたが……手術を終えた彼女には、本当にもうこの本は不要なものになってしまったのだ」
　背を向けるリッカーの表情はトーヤにはうかがい知れない。その後ろ姿は少しうなだれて見えた。
「手術を施された地球人は目に見えて感動を失う。情緒豊かな人間であってもみな一様に平坦な人格に変わり果ててしまう。彼女もそうだった。術後ここを訪れた彼女はこう言ったよ。もう知ってる、読む必要はないと」
　一冊を手に取りリッカーは向き直る。
「私はこの一冊を見て当時を思い出すことができる。彼女と交わした喜びも、彼女が変わってしまった悲しみも思い出すことができる。生の感情が私の中に波打つのを感じる。私は彼女から、そのあとに続いた地球人たちから、それを奪ってしまった」
「あなたも苦しんでいるのか」
　トーヤは短く問うた。
「そうとも。それが私を全うするということだ。右耳を捨てたあの日、私は荒波に放り込まれた。君たちを終生苛む荒波に。苦しいさ、逃げたくもなるほどに」
　リッカーは本を置いてトーヤに歩み寄る。腰掛けたトーヤを見下ろす形で、彼は肩に手を置いた。
「どうしてもと言うなら仕事はしよう。君はきっと安寧と合理性を得るが、君が見出すべき輝きを代わりに失うことだろう」
　語るべきことは語ったと、リッカーはトーヤの反応を待つ。しばしの間を置いてトーヤ

は口を開いた。
「あなたはどうして手術の仲介を?」
そこまで否定的でありながら、なぜ。曲がりなりにも仲介料を取って生活の足しにしている男とは思えない問答だ。
「引き止めるためだ。昔からつながりを欲する地球人はいたが、えてして彼らは頑なになっていた。手術室でくどくど議論するのはうまくない。そこで私が代表して君たちと話すことにしたわけだ。我々は君たちの選択に否定的だが、最終的な決定にまでは口を挟まない。言葉を交わしてなお手術を望むのであれば、我々の仲間がそれを提供する」
トーヤは険しい表情で沈黙している。リッカーの手はなめらかで温かだった。タウルス人は地球人より平均体温が高いのだ。
「そうかよ」
コーヒーのカップをつかむとトーヤは一息に飲み干した。そして立ち上がりつつ言葉を選ぶ。
「あなたは輝きってやつを過大評価している。俺は安寧と合理性を求めすぎている。手術を受ければどちらが正しい判断だったかわかるでしょう。冷静な合理的思考によって」
でも、とトーヤは言葉をつなぐ。
「今日のところは帰りますよ。もしかしたら、また来るかも」
ドアまではわずかに五歩。本当に慎ましい暮らしだとトーヤは思う。つながりから外れて、ふたつの世界を見た男がそこまで言うのなら。トーヤの天秤は今しばらく揺れ動く。
トーヤの背後から椅子の軋む音が聞こえた。座り直したリッカーは冷めたコーヒーの香を嗅いだ。
「そのまたが訪れないことを私は願うとしよう」
歩み出る顔は晴れやかとは程遠く、リッカーはそれを黙って見送る。ドアは閉じられ、居住区の静けさが戻る。
あの若者は思いとどまるだろうか、それとも……という束の間の思考を呼出し音が遮った。単調で控えめな電子音がリビングに鳴り

響く。表示された名はケイ。リッカーは応答を押した。
「やあリッカー、先日伝えた件だがね」
「ちょうど帰ったところだ。今日のところは考え直してくれたよ」
そりゃ意外、とケイは驚嘆して見せた。
「亡くなった彼女についてなにかしゃべったかい？」
「いや、ほとんど。お前はナチュラルだと言っていたが……彼はそのことを知らなかったのではないか？」
「どうだろうね。マリーは僕と彼との共通の友人だった、これは偶然だ。もっとも僕のほうが付き合いは長かったはずだけど」
ケイはマリーを生まれた頃から知っていた。マリーの両親とは古い友人だったケイは、たまに夕食に招かれ、あるいは自らの店でマリー一家をもてなす、そんな関係にあった。
「離脱者を両親に持つ生まれながらの離脱者、か。生きにくい人生だったことだろう」
「今に珍しくもなくなるさ。地球人である僕の店に出入りする離脱者も増えた。離脱者数自体も増加傾向にある」
しかし現状まだまだ離脱者のコミュニティは狭く、彼らはタウルス人とも地球人ともつかない生活を強いられる。自らの意思で離脱した本人はまだしも、その子世代となるとあまりにも少数だ。
「その子は、マリーはなぜ手術を選ばなかった。居場所がないというなら、本人が望めば手術も可能だったろうに」
「リッカー、僕は誰だ。どこからどこまでが僕で、僕とはどんなものだ」
「いきなりなにを？」
「彼女の不安はつまりそういうことさ。彼女は普通の不安定な一個の人格だった。つながるのは怖いと言っていた」
タウルス人としての居場所を得ること、つまり個を薄めつながりに入ること。それはある者にとって自己を喪失する恐怖にほかならない。つながるという判断は不可逆でありうる。

「つながることもできず、かといって離脱者のコミュニティにも馴染めず、まして地球人とは不干渉の原則だ。居場所を求めるナチュラルは多い」
　居住区近くでバーを営むケイは彼らの悩みを耳にする。それは氷山の一角だと彼は知っている。
「だからこそマリーとトーヤはひとつの希望だった。両種族が隣り合って歩めるなら」
「地球は私たちの故郷にはなりえなかったのだ」
　年々人口を減らすタウルス人。リッカーの暮らす居住区でも見かける子供はめっきり減った。風土の影響か、はたまた宇宙漂流の後遺症か、詳しいことはわからない。しかし彼らはゆっくりと滅びへ向かう種族なのだった。
「そうかもしれないな。でも僕らは隣人たりうると今でも信じているよ、僕は」
「私とお前とは特殊な例だろうがな。しかし両種族が本当に友として、恋人として歩める日が来るのならば……」
　リッカーは言葉を切る。彼はつながりを離れ、離脱者たちやごく限られた地球人とともに生きてきた半生を思った。狭い輪で過ごす日々の光と影、浮き沈みの記憶。時折訪れる出会い、止められなかった者との別れ。
「僕らは地球人類として生きられる」
　そうであればいい。それはケイやリッカーのみならず、彼らと関わりを持つ地球人タウルス人すべての夢なのだった。
「つながるべきか否か、分岐点はまだその段階だ。いずれ選択の時が来るだろう」
　それをその目で見ることは叶うまいが、リッカーは期待を捨てない。いずれわかり合う日のために。リッカーは語り続ける覚悟を抱く。